現場の仲間たち

臨床美術士

現場を続けていると、様々な臨床美術士の方に出会います。参加者のために出来るだけのことをしようという志が感じられる人ばかりで、実施の現場では参加者との出会いだけでなく、スタッフの皆さんも私にとっては大切な出会いとなってきました。

現場に参加し始めた頃、緊張もあったのでしょう、私の表情は硬かったのだと思います。先輩の臨床美術士の方にはよく「もっと笑顔を使って！」と言われていました。臨床美術士の皆さんはそれぞれにとても個性的であり、でもどこか親しみやすさが感じられます。どうしてなのか見ていると、皆さん「隙がある」というか「人間味がある」というのか、てきぱきと対応をしながらも、まるで一緒にお弁当を食べながらおしゃべりをしているような気安さすら感じられます。皆さんはそれぞれに意識して、相手に緊張させない親しみやすさをあえて作り出そうと努力しているのかもしれないと思いました。

S さんはいつもちょっと自信なさげで、「メインやって大丈夫かなあ」と遠慮したり、よく「歌の歌詞を家に忘れた」と言って取りに戻っていたり。鑑賞会では司会進行役の S さんが「えーっと」と言っている間に参加者やスタッフがどんどん感想を言って進んでいってしまったりします。でもそんな S さんですが、不思議なことに S さんがいると現場がとても和むのです。チームとして現場がまとまる。S さんが休みの時はなんだか妙に寂しいくらいなのです。何年も継続してチームを組んでいるうちに、S さんは皆にとってかけがえのない、どうしても必要な人材になっていました。

M さんは、細かいところによく気が付く方で、性格も行動も私とはまるで違う方だなと感じていました。臨床美術の現場で、どちらかというと部屋全体の方に気が向きがちな私とは対照的に、参加者個人について「そこでは本当はこうされたかったのではないか」と相手の気持ちにピッタリ寄り添って対応を悩んでいたりしました。実施後の振り返りでは、私がそのとき気が付かなかった視点からの意見が必ず出てきます。何年か経った頃、私とは随分違ったタイプの人だなあと感じていた M さんは、いつの間にか私にとって必要なものをたくさん持っている貴重な人になっていました。

旗振り役があっている人、マネジメントが得意な人、人の気持ちにそっと触れられる人、様々なタイプの人がいることで現場は成り立っているようです。また違ったタイプの人がいる方が、個々の能力も発揮されやすいのかもしれません。それはチームで実施することの多い臨床美術ならではの出会いだと感じています。